
シュレーディンガーの猫

右京 かずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュレーディンガーの猫

【Nコード】

N3695L

【作者名】

右京 かずさ

【あらすじ】

僕は、彼女と待ち合わせをしていた。
彼女と僕は、特別な関係だ。

#1

彼女が、駅の改札を抜けてくるのが見えた。

僕は、駅前ターミナルの喧騒の一番見つけにくそうな位置に立って、そんな彼女を見ていた。

もう、春も半ばで、今日の昼間は、ぽかぽかと暖かく、夜8時になった今でも、

その陽気が残っているくらい心地よい気候だった。

彼女は、厚めのコートを着て、首には、淡い色のストールを巻いていた。

そして、ターミナルに立って、きよろきよろと、かなり慌てているように、あたりを見渡した。

走ってきたのか、頬がほんのりと桜色に染まっていた。

僕は、声を掛ける風でもなく、ずっと彼女を眺めていた。

やがて彼女は、僕を見つけ出し、足早に駆け寄ってくる。

なぜか、安堵の表情を浮かべている。

まるで、悪人かストーカーにでも追いかけられていたみたいに。

「ああ、よかった。やっと見つかった……」

彼女は、僕が僕であることを覗き込むように確認すると、そう言った。

「ごめんね。少し寒かっただろう」

僕は、ちょうどよい陽気なのに、彼女に、そんな意味の言葉と言った。

「ううん。大丈夫、このコート、結構、暖かいから……」

彼女の頬が桜色から、やや早熟なリングの赤色に変わっていく。僕たちは、駅の喧騒を離れ、ひと気のない道へと進んでいった。

ここで、僕と彼女の関係を、シュレーディンガーの猫という思想実験に例えてみることにする。

シュレーディンガーの猫という概念は、わかりやすく言うと、彼女以外の観測者にとって、彼女のコートの中では、

彼女が、どんな洋服を着ているのか、ワンピースなのか、ジーンズなのか、

あるいは、様々な洋服を着た彼女が、同時に重なりながら存在しているのか、

実は、どのような可能性をも、すべからく内包しているというパラドックスだ。

まあ、早い話、彼女が、コートを脱ぐその時までは、絶対に第三者には判り得ないということだ。

普段の彼女のファッションを熟知しているような親しい友達であっても、

今夜の彼女がどんな洋服を着ているのか、正確に言い当てることなどできないだろう。

ましてや、まったく他人の第三者なら、判るわけがない。

でも、僕には、それが分かっている。

彼女がどんな服を着ているのか、あるいは、着ていないのか、

僕には、それが明確に分かっている。

なぜなら、それは、

僕が、事前にメールでそのような格好で、この駅前に来るように命じていたからだ。

でも、それなら、彼女が、

その僕の命令に反して、違った服装で来ている可能性があるのではないか？

それもないと、僕は、確信していた。

彼女の駅前で妙にそわそわした様子や、

僕を見つけたときの安堵した表情や、

僕の寒かっただろうとの問いかけに答えた彼女の言葉や、
そのときの、はにかんだような下目がちな視線とかで、

僕は、はっきりと、確信していた。

今、この瞬間に、世界中で、唯一僕だけが、正確に、彼女のコート
の中身を、

そのありさまを、まざまざと思い浮かべることが出来る。

僕と彼女は、そのような特別な関係だ。

#2

僕たちは、メインストリートをふた筋ほど入り、人通りのほとんどない、やや薄暗い狭い道を歩いていた。

いつの間にか、夜空には、中途半端に欠けた月が、やさしい光を放っていた。

彼女は、往来のない狭い道の端に、立ち止まり、僕の名前を小さく呼んだ。

やや前を歩いていた僕は、振り向いて彼女を見る。

彼女は、視線をそらしながら、静かに、コートのボタンに手を掛けた。

僕は、とっさに、慌てていない風を装い、道に人影がないか、見回した。

彼女は、僕が命じてもないのに、道の端っことで、胸元をゆっくりとはだける。

月明かりに、彼女の白い肌が揺らめいていた。

彼女は、僕が思い描いていた、まさに、その格好をしていた。

それは、僕がメールで命じた、その格好でもあった。

彼女は、視線をゆっくり僕に戻し、潤んだ瞳で見つめていた。

「どうしたんだ？ いきなり脱ぎだして……」

僕は、静かに言った。

彼女は、少し震えていた。

それでいて、頬が上気しているのが、月明かりでもはっきり見て取ることが出来た。

寒さからくる震えとは、明らかに違っている。

「恥ずかしいのかい？」

僕は、彼女に覆いかぶさるように近づき、耳元でそう、ささやいた。

「はい……」

彼女は、短くそう答えた。

首に巻いたストールがふわりと彼女の形のよい乳房にかかった。

僕は、そのストール越しに、触れるか触れないかくらいの微妙な距離感を保ちながら、

彼女の乳房に手のひらを重ねた。

「ん……」

彼女は、身をよじり、僕の手に自分の乳房を押し当てようとした。

僕は、すばやく手を引いて、その手を、彼女の頭に当てて、まるで、駄々っ子を諭すように、なでなでとしてあげた。

彼女は、一瞬、すねたように僕を見て、

そして、すぐに、子犬がはじめてのお手を褒められたような表情になった。

「そんなに、ほしいの？」

僕は、意地悪に言った。

「だって、二週間、ずっと逢ってなかったから……」

彼女は、再びコートを着て、僕の腕に寄りかかってきた。

僕は、歩みを少しだけ速めた。

彼女の胸の高鳴りが、腕を通して伝わってきた。

#3

狭い通りを抜け、車の往来の激しい道に出た。
歩道には、ぽつりぽつりと、ヒトが歩いていた。

「ねえ……」

彼女は、僕の肩に、寄りかかり、少し間を置いて続けた。

「こういう格好をしてきなさいって、メールするのに、人ごみの中で、『脱げ』って言わないんだね……」

「ん？……じゃあ、渋谷のスクランブル交差点の真ん中で、そのコートを脱いでみるかい？」

「いや、そうじゃないの。まあ、命令されたら、するかもだけど……」

「へえ……そんなことまで、してくれるんだ？」

僕は、感心した風に、言った。

「からかわないでよ。」

彼女は、少し、怒ったようだった。

僕の腕を振り解き、腕を組む。

「さっきもさあ、ヒトなんていなかったのに、わざと、私の身体、隠すようにしてくれてたじゃない？」

「そんなことないよ。早く、触りたかったただだよ。」

「よく言うわねえ……触ってくれなかったくせに……」

彼女は、ますます不機嫌になったようだった。

「ここで、はっきり言っておくとね」

僕の声が大きかったからか、彼女は、少し、びくりとした。

「僕はね、すごく、自分勝手に、わがままで、おまけに、独占欲も強いんだよ」

「うん……」

彼女は、神妙に聞いている。

「なぜ、僕の大切なモノを、赤の他人にさらさなきゃならないんだ？」

「僕だけのモノなのに、なぜ……」

彼女が、僕に抱きついたせいで、僕は、最後まで、言葉を続けることが出来なかった。

「ほんとに？」

「ああ」

「ふーん」

まんざらでもなく、彼女が頷く。

「それにね」

「うん」

「赤の他人に、僕たちの特別な関係を壊されたくないじゃないか。無粋なことを言わせないでくれよ」

「特別な関係かぁ……」

彼女は、僕の腕をとって、ぶるんぶるんと振った。

「うふふ……」

普段クールなだけに、こういうときの彼女の笑顔は、本当にかわいい。

僕たちは、川に掛かる橋を渡っていた。

橋はやけに長かったが、川の水は、干上がっており、まるで流れていないようだった。

車の通り過ぎる音が途絶えても、せせらぎの音は聞こえてこなかった。

橋を渡りきって、道を左に折れると、すぐに、ラブホテルのさまざまなお店が目につくようになる。

僕たちは、たぶん、一番近いところにある『空室』のネオンの灯るラブホテルに入るだろう。

部屋なんて、どこでもいい。

人目を気にせず、彼女を愛せたらそれでいい。
なにもかも忘れて、ただ、彼女と一緒にの時を過ごしていたい。

きつと、彼女も、そうだろう。

彼女は、黙って僕に寄り添っていたが、腕を絡めた左手は、ぎゅつと、僕の右手を強く握っている。

僕が、今すぐ、そのコートを脱げと命じたら、

彼女は、はっきりと、『はい』と返事をし、

ためらいもなく、脱ぐはずだ……

頭の中に、

僕の頭の中に、

どす黒い肉欲、

こらえられそうにない欲求、

いとしい気持ち、

彼女を引きずり込んだ後悔、

それでいて、めちゃくちゃに壊したい衝動………

それらが、複雑な濁流となって、渦巻いている。

僕は、歩きながら、彼女を凝視していた。

こんな僕に、心と身体を預けてくれる彼女を、

自分でも、なんと表現したらいいのか分からないような表情で、

僕は、ずっと、見続けていた。

僕たちは、もう、ずいぶんと前に、ルビコン川を渡っていた。

そして、すでに、引き返すことの出来ない道を、僕は、彼女と、歩
んでいる。

— f i n . —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3695/>

シュレーディンガーの猫

2010年10月21日21時00分発行